

「密告」に見られるヘミングウェイのジャーナリストの視点

はじめに

アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899-1961) はジャーナリスト出身であり、行動する作家であった。彼の行動力と男性性は狩猟旅行の趣味などにもよく表れている。そしてスペイン内戦への積極的な関りこそ彼の活動性と男性性を最もよく表す事柄であろう。勿論、ヘミングウェイの活動性と男性性ばかりに注目するのが研究ではないし、作品の表面には表れない隠れた女性性に注目している批評家も多い。しかしここではヘミングウェイの作家としての行動力がよく表現されている作品、そしてスペイン内戦時に共和国側への協力的姿勢を見せつつも、それには完全には身を投じない彼の出自であるジャーナリストの第三者としての立場が分かる短編「密告」(“The Denunciation”, 1939)¹を取り上げてみる。

ヘミングウェイ自身と作品の関連性を述べている批評は数多い。David Bromwich は “So he must write in order to be released back into his experience and then go on, without knowing why he does, until enough traces collect for him to deposit again in the form of writing” (188) と述べ、彼の書く行為と経験の緊密さを説明している。そして G. T. Dempsey は “Certainly, for a writer for whom writing was always a private act, living up to self-generated public fame cannot but affect the creative judgement, insidiously corroding its integrity” (240) と説明し、己に由来する書く事による名声と、その名声の書く行為の高潔性への影響に注目している。つまりヘミングウェイの書く行為と彼自身の強い関連性が明らかにされている。ヘミングウェイ自身の姿が作品に表れる事を示す批評は枚挙に暇がないので、この二人の批評家の紹介にとどめる。ヘミングウェイ自身の姿が作品に表れるのは、このようによく知られた事ではあるが、では「密告」においてそれがはっきりとしている部分はどこであろうか。以下の引用がヘミングウェイ自身を最もよく表す部分ではないだろうか。かつての知人が逮捕、処

刑されるのを知っていながら、知人の敵対する側へ居場所を密告してしまう主人公の心情を表す場面である。

He could have had Seguridad by simply asking on the telephone. But I had given him the shortest cut to having Delgado arrested in one of those excesses of impartiality, righteousness and Pontius Pilatry, and the always-dirty desire to see how people act under an emotional conflict, that makes writers such attractive friends. (426)

作家という単語が使われているし、ヘミングウェイと作品の緊密な関連性からも、これはヘミングウェイ自身を表す説明と考えるのが妥当である。本稿の論題は知人を見殺しにしてまでも密告する本作品の主人公とヘミングウェイ自身との関連性を明らかにする事である。密告してしまう主人公の行動は、ヘミングウェイ自身との関連でどういう意味を持っているのかを明らかにするのが本稿の狙いである。この目的を果たすために第1節では重要な場面である酒場チコーテの性格を明らかにする。そして第2節では「密告」に見られる外部の、第三者の性格を明らかにする。そして結論で本稿の論題である主人公とヘミングウェイの関連性を示し、主人公の行為がどんな意味を持つのかを明らかにしたい。

1. 人間の場としてのチコーテ

物語の主要場面はチコーテという酒場である。主人公はこの酒場に強い愛着を持っている。この節ではチコーテという酒場の性格について考察したい。ヘミングウェイがスペイン内戦に関わっていたのは既に述べたが、この「密告」と同じようにスペイン内戦を扱った作品に『誰がために鐘は鳴る』(*For Whom the Bell Tolls*, 1940)がある。この作品に見られるヘミングウェイの態度を評したものに

Charles Molesworth による “ Hemingway is perhaps creating a paradoxical point in time to reflect the dialectical balance of his emotional code ”(99)というのがあるが、同じようにスペイン内戦を扱った「密告」についてもこの考えは当てはまると考えられる。矛盾する感情が作品に反映されているのである。チコーテを説明する冒頭箇所をここで引用する。チコーテを経営する人物についてこのような説明がある。

Pedro Chicote was the proprietor and he had one of those personalities that make a place. He was a great bartender and he was always pleasant, always cheerful, and he had a lot of zest. Now zest is a rare enough thing and few people have it for long. It should not be confused with showmanship either. Chicote had it and it was not faked or put on. He was also modest, simple and friendly. He really was as nice and pleasant and still as marvelously efficient as George, the chasseur at the Ritz bar in Paris, which is about the strongest comparison you can make to anyone who has been around, and he ran a fine bar. (420)

経営者の名前がそのまま酒場の名前になっているのが分かるし、その経営者の魅力がそのまま酒場の魅力になっているのも分かる。この酒場の魅力の第一は人の魅力なのである。後に、金で買える最高のジンを使ってマティーニを出す、あるいは並のスコッチとは比べものにならない最高のウイスキーを用意してくれる(421)という酒という物の魅力を挙げているが、それは人の魅力があってこそ追加される二次的なものである。経営者の魅力のみならず、酒場チコーテは “ It was a club only you didn't have to pay any dues and you could pick a girl up there ”(420)であり、お気に入りの女性にも出会えるという異性との出会いの場としての魅力もある²。経営

者の性格という魅力、異性との出会いの場としての魅力。このチコーテは人間の魅力によって人がひきつけられる場所となっている。政治の話はチコーテではしない決まりになっていた、というのも人間重視のチコーテを説明するのに適切な特徴と言えるであろう。作品を読み始めて我々がまず始めに気づくのはチコーテという酒場は人間的好感を抱かせる場所だという事である。スペイン内戦という不穏さのさなかにあってもチコーテは人間的魅力を読者に抱かせる特徴を持っている。

では先ほど引用したヘミングウェイによる矛盾した感情はチコーテという場においてどのように表現されているだろうか。人間的好感とは逆の感情が表現されているのを示すために、Molesworthの批評を引用したのである。次にチコーテに見られる人間的好感とは反対の特徴を明らかにしたい。物語が展開するのは、昔から知っているウェイターが会話を楽しんでいる主人公たちに再度近寄ってきた時である。物語が大きく展開する場面を引用してみたい。

Just then the waiter came over. He was an old man with a bald head and very old-fashioned manners which the war had not changed. He was very worried.

“ I have a son at the front, ” he said. “ I have another son killed. Now about this. ”

“ It is thy problem. ”

“ And you? Already I have told you. ”

“ I came in here to have a drink before eating. ”

“ And I work here. But tell me. ”

“ It is thy problem, ” I said. “ I am not a politician. ” (422)

食事の前に酒を楽しんでいた主人公はウェイターから戦死した息子の話を聞かされる。そして同じように客として酒を楽しんでいる別の客は主人公の知人であり、このスペイン内戦時においてウェイ

ターの息子とは敵対する立場にある、という状況である。共和国側とファシスト側という敵対する者同士が、このチコーテでは客として場を共にすることがあり、ウェイターの息子はファシスト側に戦場で殺された、そしてファシスト側の人間が今そこにいる、という状況を主人公に伝えている場面である。

戦場で息子を殺した張本人というわけではないし、ウェイターと客という関係だけのはずである。しかし、ウェイターは息子を奪った側にある客に対して憎しみの感情を抱いている。その憎しみの感情を別の客である主人公と共有するために、ウェイターはファシスト側の人間の存在を主人公に伝えている。人の好感の場であったチコーテはウェイターの憎しみという正反対の感情によって、新たな性格を読者に示す。結果的に主人公は保安部の電話番号をウェイターに教え、古い知人であったそのファシスト側の客を密告することになる。その知人には死という現実が待っているわけだが、チコーテは好感の場から憎しみの場へと変化し、そして知人を死に追いやってしまうという裏切りに近い性格も持つようになる。

このようにチコーテは人の魅力のみならず、憎しみや裏切りなどの反対の性格も持つことになる。矛盾した特徴をもっているのだ³。人間的好感と憎しみ、裏切りは正反対の特徴であるが、ここで共通するのは人間の感情の場である、という事である。チコーテは肯定的な意味でも否定的な意味でも人間的感情を特徴とする場である。主人公はチコーテに愛着を持っているからこそ、この店に立ち寄っている。人間の魅力によってこの店を愛しているのと同時にウェイターの憎しみに結果的に加担してしまう、という人の魅力とは反対の否定的性格をこの店に与えてしまう。憎しみとは無関係を望みはするがそれはできない⁴。チコーテの性格の変化はウェイターからの情報が契機になっている⁵。チコーテの意味が、好感から憎しみ、裏切りに変化するとはいえ、ここは人間の感情の場という性格に変化はないのだ。

2. 物質、外部、第三者という特徴

チコートの特徴は人間の場である事は既に述べた。魅力であれ憎しみであれ、人との交流によってその酒場の人間という特徴は生まれている。しかし作品では交流とは反対の外界に存在する特徴、つまり交流を否定する特徴が見受けられる。この第2節では作品に人間的交流とは反対の外界や物質という性格がある事を示したい。作品のタイトルにもなっている密告の行動は知人を保安部に秘密裏に通告してしまうというものである。知人と主人公の関係をここでは考察してみる。密告してしまう知人と知り合うきっかけは賭けによるものであるが、賭けが終わった後の二人の会話を引用してみる。

“ Take these damned things and be a good man and buy me a drink. ” He emptied out the notecase. “ You wouldn’t like to buy a good Purdey gun would you? ”

“ No, ” I said. “ But look, Luis, if you need some money— ” I was holding the stiffly folded, shiny-heavy-paper, green thousand-peseta notes toward him.

“ Don’t be silly, Enrique, ” he said. “ We’ve been gambling, haven’t we? ”

“ Yes. But we know each other quite well. ”

“ Not that well. ”

“ Right, ” I said.[. . .] (425)

知人に対して賭けに勝っておきながら遠慮して金を返そうとする主人公である。主人公は我々は互いによく知っている仲ではないかと持ち掛けるが、そんなによく知っている仲ではないと知人は答える。そして主人公もたしかにその通りだと納得する。賭けをするという交流をもちながらも、互いの関係性はそれほど知った仲ではないとその交流を否定するような言葉を発している知人であり、それ

に納得している主人公である。そして知人と知り合ったきっかけも賭けによる金銭という物質なのである。そこには人間性という知人を語る上で重要な要素は見られない。知人を知るきっかけも金銭という物質なら、賭けの後の会話も関係の深さを否定するという交流の否定であり、互いに関わらない外部の存在という特徴を強調している。知人と主人公は金銭という物質のきっかけと関係の深さの否定の両方により、外部同士という特徴を帯びている。

この物語の場はスペインであるが、スペインという国について、他者や外部という説明を行っているのは Gary Edward Holcomb である。彼は “ Spain was the site of the linguistic, national, cultural, and even the racial Other, and the ritual of the corrida, a stubborn survivor of pre-Christian custom, observably manifested that culture's primeval purity ” (71-2) と述べ、スペインの異質性、他者性について述べている。こうした物語の展開される場の特徴も上で示した主人公と知人の互いが他者である、という特徴を強化するものであろう。この「密告」にはこのように外部や他者を特徴とする描写が明らかにされている。人間を特徴としたチコータとは反対の外部と他者という特徴が作品には見られるのが分かったであろう。

スペイン内戦にはナチスドイツとイタリアによるファシスト側への軍事支援に対してソビエトによる共和国側への軍事支援という対立の構図があり、イギリスやフランスは、公式には支援の立場をとっていなかった。しかしイギリスやフランス、あるいはその他のヨーロッパの国々の個人としての共和国側への支援、アメリカからの有志による個人としての共和国側への支援によって、スペイン内戦は他国を巻き込む争いとなっていった。スペイン一国という内部のみならず、外部の力は重要な力となっていたのである。James D. Wilkinson はこの事を “ As the war became progressively internationalized from the autumn of 1936 onwards, the presence of foreign troops and the support of foreign powers became even more crucial for determining its outcome ” (5) と述べ、外部の力の

重要性をはっきり述べている。「密告」の時代背景も先に挙げた Holcomb のスペインという国の異質性、他者性に加えて外部の特徴が示されている。

作品中に見られる外部の特徴を、先ほど挙げた知人との交流否定に見られる外部性に加えて示してみたい。知人を保安部に密告する事になったのは偶然によるものであるが、なぜ知人はチコーテに立ち寄ったのだろうか。

They had butchered a cow at the Embassy that day and the porter had called up at the Hotel Florida to tell us that they had saved us ten pounds of fresh meat. I walked over to get it through the early dusk of a Madrid winter. Two assault guards with rifles sat on chairs outside the Embassy gate and the meat was waiting at the porter's lodge.

The porter said it was a very good cut but that the cow was lean. I offered him some roasted sunflower seeds and some acorns from the pocket of my mackinaw jacket and we joked a little standing outside the lodge on the gravel of the Embassy driveway.

I walked home across the town with the meat heavy under my arm. They were shelling up the Gran Via and I went into Chicote's to wait it out.[...] (421)

チコーテに立ち寄ったのは肉を大使館からもらって家に帰る途中で敵が砲撃していたから。そしてそれを店でやり過ごそうとしたからだ、という説明がある。肉という物質がきっかけになっている。チコーテに行くことになったのは砲撃を避けるためであったが、肉をもらいに行ったという行動によって、チコーテが関わってくる。物質である肉が人間の場であるチコーテに関わる要因になっている。密告する知人を知るきっかけになったのは、賭けによる金銭という

物質であり、そして互いに深い仲を否定する交流の否定があった。人間的交流とは反対の物質と外部同士という特徴が、知人との関係では見られる。そして密告を行う事になるチコータに行くきっかけもまた、肉という物質である。交流という人間性とは反対の物質の要因によって、主人公は知人を密告する機会をえる。

金銭は物質であり、人間とは反対である。交流が人間の行為なら物質は交流の反対に位置し、交流を行う人間に対して外部の特徴と言える。スペインという国の特徴もスペイン内戦の国際情勢も外部の重要性が批評家によって説明されていた。主人公はスペインという舞台においてアメリカ人という外部の存在である。外部や物質、第三者という特徴は、人間的交流のチコータとは反対の特徴であり、この外部と第三者がチコータに偶然関わる事で、知人の密告は起こる。物質、外部、第三者の特徴が作品では重要な要素として挙げられている。

結 論

第1節ではチコータという酒場は魅力の面でも憎しみの面であっても人間が関係する場である事を説明した。そして第2節では密告することになる知人を知るきっかけは金銭という物質であり、また密告を行う事になった行動の元には主人公が肉を偶然もらったからという物質が関係する事、人間的交流とは反対の物質の特徴がある事を示した。作品には物質という人間的交流とは反対に位置する外部という特徴がある事を示した。主人公が外国人であるというのも外部や第三者を表す特徴である。密告を行った直後の、そして作品の最後の場面を引用してみる。

All we old clients of Chicote's had a sort of feeling about the place. I knew that was why Luis Delgado had been such a fool as to go back there. He could have done his business some

place else. But if he was in Madrid he had to go there. He had been a good client as the waiter had said and we had been friends. Certainly any small acts of kindness you can do in life are worth doing. So I was glad I had called my friend Papé at Seguridad headquarters because Luis Delgado was an old client of Chicote's and I did not wish him to be disillusioned or bitter about the waiters there before he died. (428)

この引用の少し前に密告したのがウェイターだとは分からないように“Tell him I denounced him then, will you? Nothing about the waiter”(428)と主人公は語り、自分が裏切り者のふりをするという会話をしている。密告された知人は殺される運命にあり、大差はないように思えるが、長い引用で示されているように、主人公は殺される知人がチコーテに対して悪い印象を持ったまま死んでいくのを望んでいない。だから自分が裏切り者だという役割を演じている。知人は殺されてしまう事でチコーテの記憶は固定化される⁶。主人公がとった密告の行動は知人によるチコーテの記憶を固定化させる行動でもある。

本稿の論題はヘミングウェイ自身の姿が表れるこの作品で密告してしまう主人公はどんな意味を持っているのか、という事を明らかにする事であった。人間の場であるチコーテは肉という物質によって偶然、物語の展開が起こる。知人と主人公は互いに深く関わらない外部同士であった。物質、外部そして第三者の特徴が人間の場チコーテに持ち込まれる。知人の死は知人によるチコーテの記憶が固定化される事であった。記憶の固定とは記録とも近しい特徴である。主人公の知人の密告はチコーテの記憶の固定という意味で記録であり、物質、外部、第三者の特徴が人間チコーテに関わり、密告によって記憶の固定という記録が行われる。これはジャーナリズムの姿勢である。人間の領域へ外部、第三者から迫るのがジャーナリズム

と言える。ジャーナリズムとは第三者として記録を行うものであり、死を扱うにも外部の立場である。知人に死をもたらすのが主人公だとしても、二人の交流の否定、そして主人公の知人に対しての外部性は、賭けの場面の、互いに深い仲ではないという二人の会話から既に示した通りである。死を外部として扱うのは、死の形式化とも言えるであろう。なぜなら死を客観的に見て、形式化が生まれるからだ。ヘミングウェイは Dana Dragunoiu が闘牛について “The matador and the audience attain a feeling of immortality not only because death is dealt to proxy, but also because the process is formalized and controlled”(884)と語るように死に対して形式化の考えを示している。この形式化も記録に関連付けられる事である。密告を行う主人公は記憶の固定という記録を行うのであり、これはヘミングウェイのジャーナリストとしての記録の姿勢と同じである⁷。知人の死を伴う密告はヘミングウェイの出身であるジャーナリストとしての記録の行為と重なってくる。主人公の密告の意味はヘミングウェイのジャーナリストとしての記録の行動。これが本稿の出した答である。

ヘミングウェイには沢山の短編がある。その全てが入手可能であるが、ほとんど研究されていない作品も多い。文章が短く比較的読みやすいヘミングウェイの作品は、短編においても研究する余地が十分にあり、ここで示した「密告」の解釈がヘミングウェイ短編研究という大海の一滴になれば幸いである。

1. 以下、「密告」からの引用は、Scribner、*The Complete Short Stories of Ernest Hemingway* (2003)、“The Denunciation”に拠る。
2. ヘミングウェイの詩における女性の描き方を Nicholas Gerogiannis は “The poems which deal with Hemingway’s relationships with women reveal a man who compromises his ideal of independence in order to satisfy his complex vulnerability and his needs for domesticity”(253)と説明している。「密告」の主人公がチコータに強い帰属感を求める理由の一つに女性がある事が、詩におけるヘミングウェイの女性への帰属感と重なっている。
3. 対立する要素はヘミングウェイの他の短編にも見られ、例えば (“Indian Camp”, 1925)は誕生する人間と死ぬ人間という生と死の対立が同時に見られる。
4. チコータを出る事で無関係さを保とうとはするが、これは逮捕のごたごたを避けるのみならず、ウェイターに対してのこの場での嫌気も理由になっている。これは “Well, you felt good about just now, didn’t you? Maybe you will feel good about it again. Maybe you will get to like it”(427)というウェイターへの皮肉からも読み取れる。
5. 偶然性がこの作品で重要な働きをしているが、“Is a trouble with a war,” John said. “Is a too many people crazy.”(428)という主人公たちによるチコータでの戦争についての狂気という評価がこれらの偶然のランダムさと似通っている。
6. 死によって記憶は消えるが、チコータの印象は変化しないという意味で固定である。
7. 密告したことを知人に暴露する事で、密告の本来の意味ではなくなるが、公表という意味でジャーナリズムに関係する。

引用 · 参考文献

- Bromwich, David. "Hemingway's Valor." *Grand Street*, vol. 7, no. 2, 1988, pp. 185–217. *JSTOR*, <https://doi.org/10.2307/2500708>. Accessed 11 Nov. 2025.
- Bush, Lyall. "Consuming Hemingway: 'The Snows of Kilimanjaro' in the Postmodern Classroom." *The Journal of Narrative Technique*, vol. 25, no. 1, 1995, pp. 23–46. *JSTOR*, <http://www.jstor.org/stable/30225422>. Accessed 11 Nov. 2025.
- Dempsey, G. T. "Justice for Ernest Hemingway." *The Antioch Review*, vol. 65, no. 2, 2007, pp. 239–55. *JSTOR*, <http://www.jstor.org/stable/40284380>. Accessed 11 Nov. 2025.
- Dragunoiu, Dana. "HEMINGWAY'S DEBT TO STENDHAL'S 'ARMANCE IN THE SUN ALSO RISES.'" *Modern Fiction Studies*, vol. 46, no. 4, 2000, pp. 868–92. *JSTOR*, <http://www.jstor.org/stable/26286170>. Accessed 11 Nov. 2025.
- Gerogiannis, Nicholas. "Hemingway's Poetry: Angry Notes of an Ambivalent Overman." *College Literature*, vol. 7, no. 3, 1980, pp. 248–62. *JSTOR*, <http://www.jstor.org/stable/25111346>. Accessed 11 Nov. 2025.
- Hemingway, Ernest. "The Denunciation." *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway*. Scribner 1991, pp. 420–8.
- Holcomb, Gary Edward. "The Sun Also Rises in Queer Black Harlem: Hemingway and McKay's Modernist Intertext." *Journal of Modern Literature*, vol. 30, no. 4, 2007, pp. 61–81. *JSTOR*, <http://www.jstor.org/stable/30053146>. Accessed

11 Nov. 2025.

Molesworth, Charles. "Hemingway's Code: The Spanish Civil War and World Power." *Salmagundi*, no. 76/77, 1987, pp. 84–100. *JSTOR*, <http://www.jstor.org/stable/40547964>. Accessed 11 Nov. 2025.

Wilkinson, James D. "Truth and Delusion: European Intellectuals in Search of the Spanish Civil War." *Salmagundi*, no. 76/77, 1987, pp. 3–52. *JSTOR*, <http://www.jstor.org/stable/40547962>. Accessed 11 Nov. 2025.